町医者風尹（ふういん）の謎解き診療録

史間あかし

富士見L文庫

目次

第一幕　神田の外科医　〇〇六
第二幕　二つの家紋　〇四二
第三幕　道標かさねて　一〇四
第四幕　影は光に、光は影に　一八三
第五幕　思えば真　二五八
江戸時代の時刻と方位　三〇二
江戸時代の計量単位（尺貫法）　三〇四
江戸時代の通貨　三〇五
あとがき　三〇六

登場人物紹介

■梶浦風尹（かじうらふういん）
神田の鍛冶職人町に診療所を構える、腕利きの外科医

■羽山十郎太郎左衛門（はやまじゅうろうたろうざえもん）
南町奉行所同心。風尹の用心棒も引き受けている。通称・十郎太

■皆藤卓馬（かいとうたくま）
北町奉行所同心。十郎太とは幼馴染

■苗（あかね）
神田の薬種屋「千歳屋」の末娘。薬屋小町と呼ばれている

■鏑木順寛（かぶらぎじゅんかん）
風尹の医術の師。元奥法院医師（※将軍家お抱えの医師）

■梶浦泰雅（かじうらやすまさ）
風尹の長兄。毛利一門の周防徳山領主お抱え医師

■江鶴（えづる）
泰雅の妻

■梶浦日向（かじうらひなた）
風尹の次兄。直参旗本の遠江家に仕える医師

■春（はる）
山王権現祭の日に風尹が助けた女主

■律（りつ）
春の侍女

■毛利綱広（もうりつなひろ）
周防・長門を治める二代目国主

■福間彦右衛門尉就辰（ふくまひこえもんのじょうなりたつ）
綱広の側に仕える、元江戸留守居役

■千姫（せんひめ）
越前松平家より嫁いだ、綱広の正室

■梶浦桂庵（かじうらけいあん）
風尹の父。毛利本家に仕える医師

■悸蝶（きちょう）
万寿楼の三味線弾き

■橘（きつ）
悸蝶と仲の良かった三味線弾き

■斎藤伊織（さいとういおり）
元旗本。現在は知行を返上し、下総国の真間に住む

■多江（たえ）
伊織の妻。労咳で伏せっている

■羽山幸謙（はやまゆきかね）
十郎太の父で故人。「鬼の幸謙」と呼ばれた大槍使い

■羽山佐枝（はやまさえ）
十郎太の母で、同じく故人

■羽山ルイ（はやま）
十郎太の姉。薙刀の名手

■羽山源二（はやまげんじ）
十郎太のすぐ下の弟。本所の剣術道場に通う

■阿部忠秋（あべただあき）
老中

■茂助（もすけ）
皆藤に仕えている男

第一幕　神田の外科医

雷鳴が地を穿つ。

稲光が朽ちた木戸の隙間より滑り込み、すぐにまた厚い闇が訪れる。

「世の倣いなれば」

雨と闇に紛れ、男は山中に深く埋まった廃寺に辿りついた。胸に抱いていた赤子を冷たい埃だらけの床に置く。すやすやとよく眠るその子に巻きつけた衣に手をかけた。風が差し込んだすすきの穂を取り去りながら、一枚ずつ剝いでいく。肌に触れる産着が濡れずに済んだ事に、男は不要の安堵をした。

「世の倣いなれば……」

声が震えた。言い訳にすぎぬと、百も承知している。

乱世など、じきに昔語りとなるのだ。これからは徳川の支配のもと平穏無事な日々が約束されているはずである。少なくとも表向きは。

なのに、何故。何故この赤子は、ここで命を絶たれねばならない？　太平の世に乱世の

倣いなど無意味である。不吉を背負って逝くには、この子はあまりにも幼い。幼すぎる。

「お赦しくだされ、お赦しくだされ……」

因習にのまれた愚かな主の顔を思い浮かべた。己に、この汚れた役目を命じた男の顔を。怒りとも諦めともつかぬ黒いものを腹に押し込む。

――カッ！

稲光が刹那、堂内を真昼にした。

「ふぁ」

赤子が眠りの封を解き、薄く目を開けた。身じろぎする。乳のにおいが男の鼻腔を突いた。泣きだされては困る。小さな首を両の手で包み込むと、乳飲み子は黒曜石のような静かな瞳で見つめ返す。何も言わずに、ただじっと。己の定めなど知る由もないだろう。

「うぉ……おぉぉ……おおおぉ……」

埃と蜘蛛の巣が染み込んだ堂内に嗚咽が広がった。稲光。蓮華座に傾いて座る文殊菩薩が白く照らし出される。穏やかな顔が男を見下ろしていた。右の手にある宝剣の先が欠けていた。欠けているのは、誰の心だ？　そう、問いかけられている気がした。

「福寿丸様……！」

たまらず、男は赤子を強く抱き締めた。

――あれから二十年という歳月が過ぎた。

あの雷雨の夜を、男は一時たりとも忘れはしなかった。そして本懐を成し遂げた今、ただ一人のためだけに、真の安寧を望まずにはいられなかった。

これは江戸の初め。混乱と血煙の果てに築かれた世界の一部に、いまだ壊れた歯車を内包していた頃の話である。

◆◆◆

白い陽が降り注ぎ、土埃が立ち上がる。

「もういやだ。僕は帰る。帰るったら、帰る！」

梶浦風尹は、天に向かって音を上げた。

今日は水無月の十五日、日枝神社の山王権現祭である。江戸の守り神とされた山王権現の祭りで、神輿や山車などは、市中を練り歩くだけでなく城内に入る事も許された。上様もご覧になる壮大な「天下祭」だ。きらびやかな四十を超える各町の山車には、木綿を貼りつけてつくった武将や、権現の使いである猿などが飾られている。

「もう誰も診てやるもんか」

日の出前に叩き起こされた風尹の機嫌は、すこぶる悪い。

火事と喧嘩は江戸の華と言うが、はなはだ迷惑な話だ。祭りの熱気に酔い、ある者は曲がった鼻から血を流し、ある者は外れた肩を押さえながら神田は鍛冶職人町にある梶浦診療所へ次々と転がり込んだ。さらに喧嘩で怪我をしたからと方々へ引っ張り回されて休む間もなく、袴は血と土埃ですっかり汚れてしまった。

風尹が診療所を開いて、一年と二月になる。

神田の職人衆は、この肌の白い華奢な若者を初めは藪医者ではないかと疑った。齢二十に届かぬ上に、女のような顔立ちのせいかさらに幼く見える。男たちは、ひやかし目的で診療所に通った。

ところがこの風尹、そこらの医者とは比べ物にならぬほど優れていた。外科の腕は抜きん出ており、目を背けたくなるような大怪我も顔色一つ変えずに手当した。また、本草にも明るく、草木や虫、鉱物を患者に煎じて与える事もある。梶浦診療所の評判は、あっという間に知れ渡った。

「先生に診てもらえば、まちがいねぇな」

神田の男たちは口を揃え、その後に決まって、

「あれさえなけりゃなぁ」
と、溜め息交じりにつけ加えた。
「十郎太」
人ごみの中にその姿を見つけ、風尹は声をかける。
「手、もう放していいよ」
道具箱を担ぎ直す。担ぎ棒代わりの太刀は朱塗の鞘先に桔梗の銀細工が施されていて、それが陽の光をちかちかと反射していた。
「ぶ！　何その顔、傷だらけ～！」
「笑うな！」
風尹に名を呼ばれた男は、猿回しと並んで膝を折っていた。着流しの腰に二本の得物を差している。武士だ。
「誰のせいで、こうなったと思ってんだ」
十郎太は恨めしげな声音で返した。猿は芸を披露しようとして失敗し右腕を折ったらしく、添え木をされている。十郎太は、それを取ってしまわぬように押さえる役を引き受けたために、顔にひっかき傷を負わされていた。

「痛ってぇっつんだよ！　やめろって！」
猿は捕らわれ不安なのだろう。主人がなだめるのを聞かず、左手でぺちぺちと相手の頬を叩く。ひっかき傷に追い打ちをかけられた十郎太は悲鳴を上げた。その様子を見て、風尹はとうとう腹を抱えて笑いだす。
「だめ……だめ、お腹痛いや。あはははははっ」
「笑うなっつってんだろ！」
「だから、もう放していいんだってば。その子も添え木を気にしなくなったようだし」
手を放した後も、猿は牙を剝き十郎太を威嚇している。猿回しはそんな相棒に無理やり頭を下げさせて二人を見送った。
「診療所に戻ったら手当してあげるからさ。傷は浅いけど、痕、数日は残るかな」
風尹は目の端の涙をぬぐう。
「勘弁してくれ、梶浦。奉行所の連中に、どう言い訳すりゃいいんだ」
十郎太は通称で、正しくは名を羽山十郎太郎左衛門といった。
一間はあろうかという大男で、目と口の大きな、人好きのする顔立ちをしている。南町奉行所同心を務めていた。身分は御家人。
「ふふ、正直に言えばいいんじゃない？」

「笑えねぇな。片手業がお目こぼしでも、医者の手伝いはみっともなさすぎる」
風尹より三つ年上の若者は、二年前の大火——明暦の大火——で二親を亡くした後、父の跡を継ぎ同心となった。しかし、それだけでは到底食っていけない。家には姉が一人、弟と妹が六人もいる。彼らを養っていくためには片手業、つまり副業を欲した。貧乏同心とは、だいたいがこんなものだ。中には付け届けを懐にして困窮しない者もいたが、配属や働きの違いによって身入りも異なるので皆がそうとはいかない。
そこで、武家としての面目が立つような、道場や寺子屋で教えることは、よい片手業となった。十郎太も亡き父から受け継いだ槍術の腕を見込まれ、神田佐久間町にある葛田道場を手伝っている。用心棒はかけ持ちだ。
それに、医者の用心棒というのは十郎太にとって都合のいい仕事だった。手負いの曲者が診療所に駆け込む事があったからだ。診療所を訪ねるのは役人の勤めの一つであり、つまり十郎太が風尹と行動を共にしている様は、はたから見て自然であるはずだった。
「ごめん、ごめん。僕も猿の手当は初めてだったから、十郎太がいてくれて助かったよ」
「お、おう?」
「でもさ、用心棒代は毎月ちゃんと渡しているんだから、これくらい文句言わないでやって欲しいよね」

「お、おう……」
珍しく褒められたかと思った途端に蹴落とされ、十郎太はがっくりと肩を落とした。
「だがな、用心棒の仕事なんてな、ないに越した事はないんだぜ」
ふらりと神田に現れ、たちまちのうちに評判となった風尹は、同業者から恨まれる事も多かった。嫌味を言われたり、診療所に石を投げ入れられたりするくらいなら気にはしないが、昨年の秋、とうとう夜道で襲われた。
剣の腕には少々覚えのある風尹だったが、浪人者数人に囲まれ苦戦したのを機に、用心棒を雇ってもいいなと思った。そこで、大火の折に知り合った十郎太に声をかけたのだ。最初、羽山家の苦しい台所事情を慮ってくれたのだと十郎太も喜んだのだが。実際に用心棒の出番が毎日あるわけではない。
「おい、梶浦」
呼びかけるも、医者は心太売りから軽業師、独楽売りに気移りして忙しく返事をしない。近くを山車が通ったらしく、わっと喚声が上がる。
「どうなったんだ、あの話は」
「あの話って?」
飴細工を買おうと袖の財布を取り出した手を止め、風尹は十郎太を見上げた。柔らかな

髪が風になびく。夜の闇のように深い瞳の色に、用心棒は見惚れた。
「越後高田の領主松平光長公が、お前を召し抱えたいと言ってきた話だよ。断ったそうじゃねぇか」
「なーんだ、知ってたんだ」
そう言って微笑した風尹は、飴は諦めたのか財布をしまってゆっくりと歩きだす。十郎太は追いつき横に並んだ。
「皆藤から聞いたぜ。俺は、そんな話があったのを知らなかったけどな」
十郎太は、北町奉行所に勤める幼馴染の名を口にして苦い顔になった。
「言わなくてもいいって思ったんだよ。どうせ断るつもりだったしね」
「ずいぶんあっさりしてやがるな」
松平光長は、徳川家康の次男結城秀康の孫であり、二代将軍秀忠の外孫にあたる大名だ。名家の医者として仕える事ができれば、立派な屋敷が与えられるだけでなく奉公人もつく。拒まれたほうは思いがけず顔に泥を塗られ腹を立てただろう。過去にも風尹の評判を聞きつけ召し抱えたいという家はあったが、これほどの誘いは二度とないかもしれない。
「興味がないよ。僕には、やらなくちゃならない事がある。叶えたい事があるんだ」
「叶えたいって、何をだ？」

「十郎太には、ぜったいに教えてあげない」
「あーそうかよ。わかったよ」
大男はひらひらと手を振る。
「しっかし、もったいねぇ事したな」
「十郎太は、僕が松平様に仕えればよかったのにって思うわけ？」
風尹は十郎太の顔を覗き込んだ。深い闇色の瞳に己の姿が映り込んだ。
「あ、あたりめぇだろ。てーした出世じゃねぇか」
白い肌が陽に透けるようだ。この医者は本当に男なのだろうかと疑いたくなる。前に女ではないのかと尋ねた事があったが、当人に「何言ってるのさ」と一笑された。
「冷たいなぁ。僕がいなくなったら、十郎太たちは飢え死にしてしまうよ」
「そうなりゃ他に片手業を探す――って、俺は真面目に忠告してやってるんだぜ」
「僕は不真面目に答えてるよ」
「お前なぁ」
「そうだ。ねぇ、十郎太。粟餅を買って帰ろうよ。茜ちゃんも喜ぶよ、きっと」
「あ、ああ。悪くねぇな、粟餅」
十郎太は頷き、首筋に滲んだ汗を拭った。

粟餅の屋台までは、この人混みなら回り道をしたほうが早い。裏路地に入り右へ折れると、さらに道幅が狭くなった。突き当りに小さな稲荷神社があって、そこを抜けると粟餅屋の裏手へ出る。舞うように軽やかに進む風尹の背に、十郎太が気を取られた。

その時だ。

「何をするのです!?」

神社のほうから女の悲鳴がした。

「誰か、誰か！」

助けを求める声には、焦りと恐怖の中にも凛とした気品が混ざっている。

女が二人、鳥居を背にして立っていた。一人は歳の頃二十ばかりの若く美しい女だ。藍を基調とした小袖には、右肩から左下へ向かって大きな花が描かれ、ところどころに赤や金糸、銀糸が織り込んである。横で結んだ鮮やかな朱の細帯も、商家の娘あたりを気取っているつもりのようだ。しかし、これほどの衣は、名の知れた豪商でもない限り町人ではなかなか身に着けられない。

おそらく女は身分の高い武家の者で、町人になろうとして、なりそこねていた。それは振る舞いからも推測できた。担ぎ手たちに放り出されたらしい小さな駕籠も、よく見れば敷物が不自然なほど豪奢だ。もう一人も上等な扇模様の衣をまとっている。二人の年頃は

近いように思われたが、扇模様の小袖のほうは侍女であるようだった。女主をかばい一歩前へ出て両腕を広げている。主と思しきほうは短刀を構えていた。

「立ち去りなさい。立ち去るならば咎めはしません」

汗にまみれた白い首筋に、結い下げた髪がはりついている。緊張に満ちた凛々しい物言いであるが、声音は鈴のように愛らしい。

「それは聞けない話だ」

女を囲む四人の男たちも、実に奇妙な形をしている。

彼らは一見すると「旗本奴」と呼ばれるかぶき者のようであった。昨年あたりから江戸の町を徘徊しだした男たちで、異様ともいえる派手な着物をまとい大小を差し乱暴な言葉を扱う。しかし、どこか違和感がある。

「姫君」

小柄な男が言う。三十頃だろうか。腰に派手な紅梅の着物を巻きつけてはいるが、括袴は乾いた泥土で汚れ、膝の部分が擦り切れている。

「勝手に出歩かれては困る、と言われませんでしたか」

「口のきき方に気をつけなさい」

侍女が睨む。彼らは、どうやら顔見知りのようだ。

「偉そうに。言えた立場かよ」
背の高い痩せた若侍が口を挟む。齢二十を越えないように見えた。波模様を鮮やかに染め抜いた着流し姿で、右足に重心をかけて斜めに立っていたが、革足袋にしっかりと草鞋を巻きつけていた。腰の得物も飾りではないようだ。違和感を覚えるのは、彼らの出で立ちや言動の目立たぬところに、血なまぐさい気配が見え隠れしているからであろう。世を疎み惰性で徒党を組んでいる旗本奴たちとは違う、何か、役目を負っているように思えた。
「おとなしく屋敷に戻りな。あんたには他に帰る場所はねぇんだよ」
若侍は舌なめずりをして一歩近づく。
「ぶ、無礼者！　それ以上近寄れば、さ、刺します！」
女主は侍女を押しのけ前へ出た。短刀を持つ手が震えている。
「やれるもんだったら、やってみな」
「あ――」
細い手首がひねり上げられ、短刀は容易に取り上げられた。
「春様！」
侍女が悲鳴を上げる。

「放しなさい！　その御方を、どなたと心得ているのですっ？」
「さあ。一体どなた様なんだろうなぁ？」
「……！」
答えられずにうつむく姫君を、旗本奴――におそらく扮しているのであろう若者は、歪んだ笑みを浮かべながら引きずり出し、押し倒す。
「春様！　春様から離れなさい！」
若侍に飛びついた侍女は、すぐに引き剥がされた。男二人に片腕ずつを取られる。
「あの御方の許しなく傷つけるのは都合が悪い」
小柄な男が若侍を制した。
「その女をやれ。これを消しておけば、姫君も今後は安易に屋敷を抜け出そうなどとは考えまい」
「斬れるなら、どちらでもいい」
若者は抜刀した。柄を握る手に力を入れる。
「い、いや……！」
柄巻が鮫皮をこする、ぎりぎりという音がやけに大きく響いた。男たちから逃れようとする侍女の右肩を、白刃がかすめる。

「律！」
女主は侍女の名を悲鳴で包んだ。若侍は崩れ落ちた律に獰猛な笑みを向ける。
「楽には死なせてやらねぇ」
腕は振り上げられた。研ぎ澄まされた三日月がぎらりと光り、侍女の脳天に――
ギィィィッ！
落ちた音、ではなかった。
「……？」
律は薄く目を開け、その背を見上げる。陽に溶けそうな柔らかな髪がさらりと揺れた。
「誰だてめぇは⁉」
「医者だよ」
乱入者は若者と刃を合わせ笑んでいる。風尹だ。道具箱に通していた太刀を抜き、袴の足を肩幅ほど開いて相手を押していた。
「じゃ、邪魔するなら、てめぇから斬るぞ！」
若者は声を荒らげる。刀を交えて立っているだけだというのに、額には汗がにじみ呼吸はかすかに乱れ始めていた。
「へぇ。僕を斬るつもりなの？」

「……く！」
「おあいにく様。そんなでたらめな力押しで僕は退けられないよ」
己よりも明らかに華奢で女のような相手に、押されている。太刀がよくなじんでいるはずの男の腕が、みしみしと痛みだす。
「僕は斬れない。お兄さんみたいな人にはね」
風尹は鼻で歌うように言い、相手を押す手に力を加える。若者は一歩後退させられた。
「お兄さんの刀から、僕の嫌いな臭いがするよ。血と脂の臭い。切れ味の鈍くなったその刃を見せつけて口の端を緩めながら斬るのが好きだなんて、最悪だね」
「つ、強がりはよせ。てめぇも、そこの女のように泣き叫べ。い、命乞いをしろっ」
そう言う若者の顔は、しかしながら完全に強張っていた。手の先が震え、合わせている刃がぎちぎちと微かな音を立て始める。
「強がり？」
風尹はにやりとした。
「いやだなぁ――僕は強いんだよ！」
男の腹を蹴り飛ばし、尻餅をつかせる。
「あはは！　かっこわる～い！」

腰に手を当て、勝ち誇ったように声を上げた。
「ちくしょう！」
「許さねぇ！」
医者の悪ふざけを目の当たりにして、男たちが次々と吼える。
「ひねりのない悪党の言い草だね」
剝き出しの殺意に囲まれ、風尹の口はますます緩んだ。侍女が主のもとへ駆け寄るのを横目にすると、尻餅男の前で屈み人差し指を立てる。
「せっかくの山王権現祭だし、これ以上の無粋はなしにしようよ。僕たちは粟餅を買いに行く途中なんだ。黙って退いてくれるなら、見逃してやってもいいよ」
「見逃してやるだと？　ふざけるな！」
「二度は言わせないでよね」
風尹は腰を伸ばすと、愛刀の先を尻餅男の鼻頭に向けた。男は尻をにじって後退するが、医者は笑みを浮かべたまま きっちり間を詰めてくる。白刃に睨まれた男の額から顎へ、汗が流れ落ちた。
「僕は気の長いほうだけどさぁ。お兄さんの事は嫌いだって言ったよね？」
「……！」

「言ったよね」
屈辱。男たちは皆、怒りに顔を染めた。
（――ったく、つき合わされる身にもなれってんだ）
数歩離れた場所で、十郎太は額に手をやる。医者は、旗本奴相手に遊ぶつもりだ。
「うわぁぁぁぁ！」
小柄な男が耐え切れずに声を上げた。風尹の背めがけて袈裟がけの一閃を浴びせる。医者は身を翻してこれを紙一重でかわし、ひねった腰を戻す流れを利用して相手の首筋に白刃をぴたりとつけた。
「くそ！」
尻餅男の歪んだ怒りが沸騰する。若者は隙をついて立ち上がり、駆ける。怒りの矛先を、風尹ではなく侍女へ向けた。
「きえええ！」
奇声を発しながら渾身の一撃を振り下ろす。今度こそ仕留めた。そう思った。
――ガッッ！
「な――!?」
若者の双眸に、大男の姿が映り込む。

「そこまでにしておけよ」
十郎太だ。女たちの前に立ち、強襲者の太刀を受け止めていた。相手の得物が駕籠の担ぎ棒であると解した若者は、とっさに後方へ跳び間合いを取る。刀の倍以上の長さがあり、駕籠を担ぐために太く削られた棒を軽々と扱う男に驚きを隠せない。
「気をつけた方がいいよ」
十郎太の行動を完全に予測していたらしい風尹は、その場から一歩も動いていなかった。
「僕の用心棒は、凄腕の槍術使いだからね」
「お前は用心棒の無駄遣いだよな」
「何それ、ぜっんぜんおもしろくないんだけど」
風尹は頬を膨らませる。
「ねぇ、これ以上やり合うつもりなの？　無駄だと思うけどな。それとも大騒動にして、お縄になりたいの？　今日は人通りも多いしね。裏路地とはいえ、そろそろ誰かが番屋に走っている頃じゃないかなぁ」
「それは困ります！」
声を上げたのは男たちではなく、女主のほうだった。
「刀を納めなさい」

春は短刀を鞘に戻し、肩を押さえる律を支えて十郎太と若侍の間に立つ。
「騒がせました」
鈴のように澄んでいて、風に揺れる稲穂のように柔らかな声の持ち主は頭を下げると、四人の男たちの顔を順に見た。
「これ以上の騒動は、あの御方にも及びます。わたくしは決して裏切りません。屋敷へは必ず戻ります。わたくしは、わたくしの想うただ一人の御方のためだけに、在るのですから」
男たちは睨み返す。
「屋敷に戻ると言っているのです。それとも、このまま共に役人に捕まりますか？」
「……」
小柄な男が片手を上げる。男たちはそれを合図に刀を鞘に納め、舌打ちをしたり地に唾を吐き捨てたりしながら祭囃子のほうへと消えていった。
「大事はありませんか、律」
「はい、春様」
波模様の着物がすっかり見えなくなると、気が抜けたのか侍女がその場に座り込む。眉間に苦痛の色が浮かんでいた。肩の傷は思ったより深いのかもしれない。

「僕が診て差し上げましょう」
「おい梶浦」
刀を納めた風尹が道具箱を持って駆け寄る。それを見た十郎太が声を上げた。
「平気なのか？」
担ぎ棒を置き医者の肩に手を置いた。
「大丈夫だよ、これくらいなら」
医者は用心棒に力なく微笑んでみせる。
「あの、よろしいのですか？」
春が尋ねる。
「気にしないでください。僕は梶浦風尹といいます。こう見えて、神田で診療所を開いているんですよ」
「梶浦……？」
それを聞いた春は双眸を丸くした。
「律さん、でしたね」
「は、はい」
「すみません。少しだけ帯を緩めます。十郎太は見ちゃだめだからね」

「見ねぇよ」
用心棒が背を向けたのを確かめ、襟をずらす。白い肩が露わになった。風尹は大きく息を吐き出すと一度目を閉じる。額に浮かぶ汗を拭い道具箱へ手を伸ばした。
「切り傷によく効く膏薬があります。三日間、朝昼晩しっかりと塗り込んでください。それから新しい晒に取り換えるのも忘れないで」
「ありがとうございます。よかったわ、律」
春は礼を述べると、手当が終わるのを待って侍女の襟を正してやる。
「あの男たちとは顔見知りのようでしたね」
「……いえ、その」
女主は目を伏せる。
「べつにいいよ、話したくないなら」
風尹は立ち上がり、道具箱を太刀で担ぐ。改まった話し方に疲れたのか、いつも通りの口調になった。
「もっと上手に化けたほうがいいとは、思うけれど」
「上手に、ですか？」
「もっと、ちゃんと町人に見えるようにね。それ、すごく目立つよ」

「……町人には、見えませんか。それは迂闊でした」
春は肩を抱くようにして身を丸める。それから、ゆっくりと顔を上げた。
「梶浦様、お礼を。これで足りるでしょうか？」
「わあ、かわいい」
春が懐から取り出したのは、小さな香袋だった。赤地に黄色の小花を散らしてある。誰かの手作りだろうか、縫い目がたどたどしく歪んでいた。
「受け取れないよ。だってこれ、大事な物でしょ？」
懐に入れ持ち歩いていた事を考えれば、思い入れのある品に違いなかった。
「いいよ、お礼なんて。僕たちのせいで、相手を余計にけしかけちゃったみたいだし」
「梶浦にしちゃ、まともな事を言うじゃねぇか」
風尹の横に立った十郎太は、目を丸くする。
「受け取っていただけなければ、わたくしが困ります」
そう言うと、春は強引に香袋を握らせる。柔らかな香気が手の内から鼻へと伝った。
「香袋ですが、中には小さな観音菩薩像も入っています。金を彫って作らせました」
「えっ」
風尹の目の色が変わる。袋の紐を急いで解き、中を確かめた。つまみ出すと親指大ほど

の観音が現れる。
「ほんとだ。金の観音様だぁ」
「膏薬のお代になるかは、わかりませんが」
「なるもならねぇも、もらいすぎ――がは！」
言いかけた十郎太の顎に、銀細工の鞘先がめり込んだ。
「やだなぁ。ちゃんと足りますよって言いたかったんだよね！」
「……この守銭奴が」
用心棒は顎を押さえて雇い主を見下ろす。
「十郎太のでたらめなんて、聞こえなーい」
風尹は耳に指を突っ込んで目を半月にした。
「どこがでたらめだよっ？」
「まあ」
それを見た春は、袖を口もとへ持っていきくすくすと笑声を立てる。
「戯れはここまでにして」
風尹は香袋を春へと押し返した。
「戯れで殴ったのかよ」

「あー、わかった、わかった。十郎太、悪かったよ」
医者は面倒くさそうに言った。
「ねぇ、春さん。こんな高価な物やっぱり受け取れないよ。お代はいいから、もう無茶はしないって僕と約束してくれないかな」
「いいえ」
姫君は首を振る。
「少しくらいの無理は覚悟の上。わたくしには、成さねばならぬ事があるのです。……梶浦様。これはあなた様に、どうしても受け取っていただきたいのです」
そう言われ、風尹は香袋を強く握らされる。花のような春の微笑に、ほんのわずか影が映り込んだ。

陽は傾き、じきに暮れ六つを報せる鐘が鳴ろうかという頃。鍛冶職人町の横丁沿いに建つ梶浦診療所の前を、団扇売りが通り過ぎた。
診療所は立派な土蔵造で、他所へ引っ越すという金物問屋から買い取ったものだ。一階には板床の診療部屋と畳敷きの居間があり、居間の簞笥階段を上がった二階には風尹の寝間と書物を積んでいる部屋があった。

居間の縁側に顔を出した茜は、腰に手を当て仁王立ちになった。
「いい加減にしてくださいよ」
風尹よりも一つ年下の茜は、くりくりとした大きな目が愛らしい娘だ。花を織り込んだ鮮やかな着物がよく似合っている。
茜の家は診療所と同じく神田にあった。大通りに看板を出す大店「千歳屋」といって、上方にも聞こえるほどの薬種屋だ。そこの末娘である茜は、薬の知識に関しては並の医者では及ばない。風尹が診療所を開く際に何かと世話を焼いたのが縁で、そのまま助手になった。
「先生ったら！」
「もうちょっと～」
庭で、風尹は十郎太を相手に木刀を振っていた。
「いいですか、先生。夕餉までには汗と埃、流してくださいね。それから羽山の旦那。あたしの万能膏薬をちゃんと腕に塗ってくださいよ。言われた通りにしなかったら、味噌汁に痺れ薬を盛りますからね」
茜は縁側に貝の器を置き、その下に紙の束を挟んだ。彼女が生薬を練って調合した万能膏薬は打ち身や切り傷によく効き、千歳屋の看板商品になっている。これを紙に塗り貼っ

ておくと、どんな痛みでも一晩で治ると評判だった。先ほど風尹が律に処方したのもこの薬だ。

娘が立ち去ったのを見計らい、十郎太は溜め息をつく。

「何で茜殿はああ口うるさいんだろうな」

「十郎太を心配しているんだよ」

風尹はうんうんと頷いてみせる。それから急に神妙な面持ちになった。

「右腕、まだ痛むの？」

「たまにだ」

十郎太は頭をかく。それから右の手首を見つめた。

「僕はね、十郎太。その傷はとっくに治っていると思うんだけど」

微笑した医者は、歩み寄って用心棒の腕を取った。袖をめくる。右肘の下から手首にかけて、白く浮き上がった裂傷の痕があった。

「二年前の火事の時に、崩れ落ちてきた柱から母上の佐枝さんをかばってできた傷。痕は残ったけど骨は何ともないし、稽古用の槍だって握れるでしょ。昼間だって、あんな大物を振り回しちゃってさ」

「ああ、そうだな」

「でも、あの槍。十郎太が亡くなった父上から受け継いだ大槍だけが、握れないんだよね。握るとその傷が痛むからって」

「あの槍は、いろいろとな、重てぇんだよ」

「いろいろ、ね」

風尹は息をついて手を放す。

「茜ちゃんの言う事は聞かないとだめだよ。怒らせたら神田の職人衆を敵に回すからね」

薬屋小町と呼ばれている茜を目当てに通って来る患者も多い。

「色気のねえ女には興味ねぇな。それに、色気っていうなら、どちらかってーと」

「何？」

「……いや、何でもねぇ」

闇色の瞳に見つめ返されて用心棒は咳払いをした。

「聞こえましたよ、旦那」

「げ……！」

十郎太の顔が引きつる。居間に戻って来た助手は、ふふふという奇妙な笑い方をして肩を震わせた。

「あたしの事は好きに言っていただいて結構ですけどね、先生をいやらしい目で見るのは

だめですよ」
「見てねぇ！　男相手にそんな事があってたまるか！」
「旦那が変な気を起こさないように、あたしがしっかり見張っていなくちゃ」
「茜殿の中で、俺は一体どんな男になってんだ」
うなる十郎太をしり目に、茜は風尹に言う。
「先生、野次馬は皆追い払っておきましたから」
「あはは、ありがと」
昼間、路地裏で風尹が律の手当をしていたところを誰かが見ていたらしい。
――あの梶浦先生が、女を診ていた。
その誰かが町中に触れ回ったのだろう、診療所を囲んで人だかりができた。表から中を覗いたり、裏手に建つ長屋の屋根に登ったりして、風尹の様子を観察しようとした。ここまでの騒動になったのには訳がある。
「あれさえなけりゃなぁ」
と、日ごろ皆が囁き合っている事。
風尹は、女の血を受け付けないのだ。

「あたしもね、驚きましたよ」
夕餉の膳を前に茜は切り出した。
「先生が血止めされたんでしょう？」
「まあね」
風尹は膳をのぞき込み「美味しそうだね」と笑ってはぐらかす。千歳屋の縁戚に漁師がいて、釣った鰻を持参したらしい。それを、茜は醤油や酒などにつけて焼いた。
「万寿楼に、徳治さんって板前がいるでしょう」
「うん。腕がいいって評判だよね」
「その徳治さんが、鰻を開いて一度蒸した後で焼くと、臭みが抜けて美味しいって教えてくれたんですよ」
蒲焼きが登場するのはもっと後の話で、当時はぶつ切りにするか、丸ごと串に刺して焼くだけだった。
「どうして黙っているんです？」
なかなか箸を持とうとしない二人に茜は怪訝な顔をする。風尹は酒を一杯ひっかけた後は香袋を目の高さで揺らしてもてあそび、十郎太は青い顔を茜に向けた。
「旦那。痺れ薬は入れていませんから安心してくださいよ」

「茜殿ならやりかねない」
「四の五の言わずに食べてください！　先生は……やっぱり、ご気分が優れないんじゃありませんか？」
「そうじゃないよ」
「でも。女の人の血を見たら、必ず発作を起こされるじゃないですか」
「今日は平気だったんだ。深手じゃなかったし」
風尹は香袋を懐にしまい、にっこりと笑む。
「何が平気だった、だ」
ようやく鰻に箸をつけた十郎太が溜め息をつく。
「顔は真っ青になる、吐きそうだと言って道に座り込むで、なかなか動けなかっただろ」
「やだ、先生ったら。次は気をつけてくださいよ。あまり無茶をしないでくださいね」
「うん、ありがとう」
「その懐のやつはどうするつもりだ？」
十郎太は飯を平らげると、箸の先で風尹の懐を指す。香袋の観音像は相当高価なものに違いなかった。
「まさか売るってんじゃねぇだろうな。神仏で金儲けを考えると罰が当たるぞ」

「いやだなぁ。僕にだって畏れ敬う心くらいあるよ」
「だよな、安堵したぜ」
「しかるべき目利きに、ありったけの銀子に替えてもらわないと失礼だよね」
「――って、ぜんっぜんわかってねぇ！」
「あたし、温泉に行きたいって思っていたんですよ。箱根に湯治なんてどうです？」
茜は胸の前で手を打つ。
「お伊勢参りもいいよね。大坂や京にも寄って美味しい物たくさん食べたいなぁ」
「お前らな」
はしゃぐ二人を睨みながら十郎太は茶をすする。酒は得意ではなかった。

祭りの日の夜。風が首にまとわりつく息苦しい闇の中で、御用提灯が集まる異様な場所があった。大川の下流は、江戸のはずれにある辺鄙な土地である。もうじきここに両国橋が架かるが、今はその影すら見当たらない。深川や本所が栄えるのも先の事で、この頃はまだうら寂しい場所であった。
そんな、何もないはずの場所に奉行所の役人が集まっている。各々手にする提灯を掲げ、川面や縁を照らしていた。腰を折り曲げ何かを捜している者もあった。

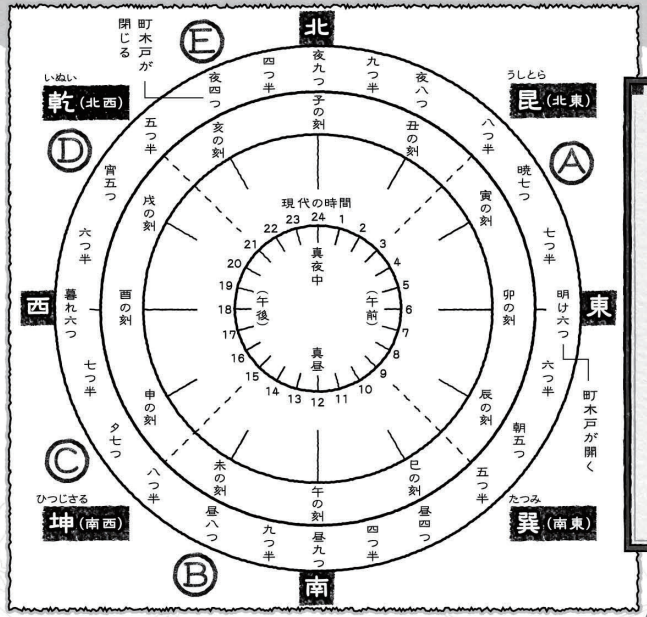
「あ、皆藤さん」
闇の中から提灯も持たずにぬらりと現れた男を見つけ、同心の一人が声を上げる。
「よう」
北町奉行所同心の皆藤卓馬は片手で応えた。
「夜中に手間だったな」
切れ長の目を若い役人へ向ける。女が放っておかない艶のある貌を持つ男は、慣れた手つきで羽織を端折って帯に引っかけた。
「お珍しいですね、そのような格好をされているのは」
若い役人は丸い顔を灯りに浮かべ、皆藤の頭からつま先までを眺めやる。着流しに黒羽織、懐から十手袋をのぞかせている姿は、奉行所の役人らしい決して「お珍し」くはないものだった。
「仏に用がある」
そう言って皆藤は岸辺にしゃがむ。視線の先には蓆をかぶった――死人があった。はみ出た黒髪は濡れて重たく草の上に流れている。
「いい女だった」
「お知り合いでしたか。まさか、この人。皆藤さんの」

「勘違いするなよ。まだ二言三言しか交わしちゃいねぇ。ただの顔見知りだ」
「ひょっとして、皆藤さんが隠密裏に探っておられる一件と関わりが？」
皆藤は、奉行所では少々特殊な役回りを担っている。刀を帯びずに市井に紛れ、密かに探査を行うのが仕事だ。奉行所に定廻り、臨時廻り、隠密廻りの三廻が誕生するのはまだ先になるが、北町奉行所では、二年前の大火をきっかけに、この隠密廻りのような役目を秘密裏に設けていた。
「近頃市中に出回っている妙な薬の出処を突き止める、でしたっけ」
「ああ。厄介な仕事だ」
隠密役は蓆をめくり、蠟のように硬く白くなった女の頬をなでてやる。皆藤と同じ目元に黒子のある、色っぽい女だ。浅利検校という盲目の僧のもとで三味線を習っていた。つましい暮らしぶりだったが、近頃やけに金回りが良くなったという。皆藤は、女がどこからか「妙な薬」を手に入れ、売りさばいているのではと睨んでいた。女の周りで薬の噂が立った時期が重なるのも怪しい。
（斬られた痕も、首を絞められた痕もねぇな）
体は濡れているが水は飲んでいないようだ。顔かたちは息をしていた時とさほど変わらない。遺骸は川縁に仰向けに寝かされていたという。川に捨て、またすぐに引き上げられ

たのだろうか？
（下手人は忘れ物でもしたのか？）
皆藤は女の口もとへ顔を近づけた。
「か、皆藤さん？」
驚いた丸顔の役人は、思わず色男の肩をつかむ。皆藤は構わず鼻をひくつかせた。
（甘ぇ、においがするな）
皆藤は立ち上がり肩の手を払うと、付近を捜索している者たちへ声をかける。
「そこらを捜しても何も出てこねぇよ。それよりも女を奉行所に運べ。脱がす」
「ぬ、脱がすって！」
丸顔の役人は慌てて首を振った。
「そりゃあんまりですよ。むごい死に方をしたんですから、そっとしておいてあげましょうよ」
「むごい死に方だったかどうかは、まだわからねぇだろう？」
隠密役は鼻を鳴らす。
「どんな女なのかは、大概におえばわかるもんだが」
「に、におい、ですか？」

「それでもわからなけりゃ、脱がせるしかねぇ。それとも、なんだ。死人に脱がせてもいいですかと訊けばいいのか？」
「い、いいえ。それは無理な話です。なにせ死人ですから」
「これが本気で好いた女だったらと思うと、ぞっとするな。向こうから帯を解きたくなるよう仕向けるのが俺の趣味だからな」
そう言うと、皆藤は女に蓆をかぶせてやる。
「まあ、あいつにゃ一生かかってもわかんねぇだろうが」
「あいつ？」
「ある女を好いているのにそれに気づかない、ばかな男がいるんだよ。まったく、あいつにだけは渡したくねぇもんだ」
「意外です。皆藤さんにも、本気で好いた女子がいらっしゃるんですね」
皆藤は女遊びにしか興味がないのだと思っていた役人は、目を丸くした。しかも、その本気で惚れた女を誰かと取り合っているらしい。
「ああ、とびっきりのいい女だよ」
隠密役は空を見上げる。大川をきらきらと照らしていた月が、横から伸びてきた雲の手に覆われ隠れてしまった。

江戸時代の時刻と方位



江戸時代の人々は、日の出の「明け六つ」に起き出し、日が落ちて暗くなれば休む生活を送っていました。一日は、現在のような二十四時間で分ける定時法ではなく、日の出と日没を基準とし、昼と夜をそれぞれ六等分して十二刻とする不定時法でした。また、時刻や方位に十二支を割り当てていました。

一刻は二時間

一日を十二刻で分ける不定時法では、一刻（一時）は二時間となります。半刻（半時）はその半分の一時間、四半刻（四半時）はさらに半分の三十分前後です。ただし、日の出と日没を基準にしていましたので、夏と冬とでは一刻の長さは違いました。

時刻は「時の鐘」の数で知る事ができました。まずは、前触れとして三回鐘を撞き（捨て鐘）、少し間を置いて時刻の数を撞きました。

時刻と江戸の生活

江戸時代の人々の時間感覚は、分刻みの毎日を送る現代の私たちと比べると、ずいぶんと大まかだったようです。そんな彼らの生活の一部を、『町医者風尹の謎解き診療録』のシーンを絡めながらご紹介しましょう（記号は右の図と連動しています）。

Ⓐ 暁七つ

東海道五十三次の道中を歌った民謡『お江戸日本橋』の有名なフレーズ「お江戸日本橋七つ立ち」の「七つ」はこの時刻です。日没までに目的地もしくは宿屋に入っておきたかった旅人たちは、朝早くに出立しました。山王権現祭の日に風尹が叩き起こされたのも、だいたいこのくらいの時刻。

ちなみに、この一刻後の「明け六つ」になると、町と町の境に設けられた町木戸が開きます（日の出の約三十分前）。ほとんどの人がこの時刻に起き出します。

Ⓑ 昼八つ

本編では、怪蝶が北町奉行所へ三味線を届けると約束した時刻でしたが……。「おやつ」の語源としても知られています。江戸時代の中頃までは一日二食だったので、この「昼八つ」に間食を挟んだそうです。そういえば、風尹たちが診療所で粟餅を食べていた時刻でもありますね。

Ⓒ 夕七つ

鏑木が風尹に北町奉行所へ来るよう命じた時刻。本編では「申の刻」として登場します。あと半刻もすれば、職人たちは仕事を終えます。「夕七つ」の一刻後「暮れ六つ」は、日没の約三十分後です。

Ⓓ 宵五つ

子どもは寝る時刻。また、旗本屋敷の門限でもありました。診療所に向かったはずの茜の行方がわからなくなったのは、この半刻後の五つ半でした。

Ⓔ 夜四つ

町木戸が閉じる時刻。これ以降、木戸番（番太郎、番太とも）が通行を認めた者だけが潜り戸を抜けられました。その際、木戸番は目的地まで拍子木を鳴らしながら付き添いました。町をまたぐ場合、木戸番は交代しながらついて来ました。これが「町送り」です。風尹じゃなくても恥ずかしいかも。

江戸時代の計量単位（尺貫法）

尺貫法は日本独自に発展した計量単位です。七〇一（大宝元）年の大宝律令において唐の度量衡制度を手本に大尺・小尺が制定され、これが日本初の単位制度の確立となりました。尺については、律令制度崩壊後、時代や地域、用途によって様々な単位が用いられました（「又四郎尺」や「享保尺」など）。また、質量の単位である貫は銭千枚（千匁）の重さでしたが、こちらも時代によって差がありました。計量単位が全国統一されたのは一八七五（明治八）年で、尺貫法という名称になったのもこの年です。

■十郎太の身長

十郎太の身長は約一間、百八十センチメートル強です。江戸時代の男性の平均身長は約百五十五～百五十八センチメートルと推定されていますので、かなりの大男と言えます。

■鴨居下の高さ

昔の鴨居下の高さは五尺七寸（約百七十三センチメートル）です。十郎太が診療所の鴨居で頭を打つ場面がありますが、彼が油断をするとああなります。

■八丁堀同心の屋敷地

同心の屋敷地は百坪（約三百三十平方メートル）ほどありましたが、全部を生活スペースとして利用するのではなく、別棟を建て人に貸したり、畑をつくったりしなければ生活は厳しかったようです。

換算表　明治８年統一値

■長さ

１丈＝10尺＝3.03m

１尺＝10寸＝30.3cm

１寸＝10分＝3.03cm

１分＝3mm

１里＝36町＝3.93km

１町＝60間＝109m

１間＝６尺＝1.82m

■面積

１町＝10反＝3000坪＝99a

１反（段）＝10畝＝9.9a

１畝＝30坪＝99㎡

１坪（歩）＝６尺平方＝3.3㎡

１尺平方＝0.09㎡

■重さ

１貫＝1000匁＝3.75kg

１斤＝160匁＝600g

１匁＝3.75g

■容積

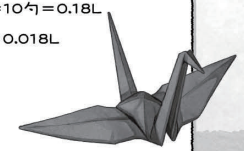
１石＝10斗＝0.18kL

１斗＝10升＝18L

１升＝10合＝1.8L

１合＝10勺＝0.18L

１勺＝0.018L



江戸時代の通貨

江戸時代、金・銀・銅（銭）は異なる単位で勘定しました。金一両＝銀五十匁（元禄以降六十匁）＝銭四貫文（四千枚）が公の相場でしたが、質の悪い貨幣が発行されると相場は変動したようです。地域や身分によっても取引通貨は異なり、上級武士は金、下級武士と商人は銀、庶民は銭を主に用いました。江戸時代の通貨を現在の貨幣価値に換算する事は困難です。同じ一両でも、米や蕎麦、団子など品物の生産や流通の仕組みにより、現在の価格に換算すると六万円や十二万、三十万円など価値は変化します。

■千歳屋の高麗人参薬

千歳屋の高麗人参薬は一袋三両。十五～二十日分が入っていて、これを薬湯にして服用します。調合された高麗人参は約四十グラム。この場合の三両は、現在の価値で約二百三十万円に設定しています。

江戸初期の高麗人参は天然物の輸入品でした。古来より人気のある薬で希少価値も高く、ちょうど本作と同時代、四代将軍家綱の頃には価値が高騰したそうです。八代将軍吉宗の時代になって日本でも人参が栽培されるようになりましたが、それでも庶民には手の届かない高級品でした。

江戸時代の物価に興味のある方は、小野武雄編著『江戸物価事典』（展望社）をおすすめします。

江戸時代の通貨

■金貨＝計数貨幣

・小判＝１両

・１分金＝1/4両

・１朱金＝1/16両

■銀貨＝秤量貨幣

・１分銀＝1/4両（江戸中期以降）

・１朱銀＝1/16両（江戸中期以降）

・丁銀、豆板銀は種類により重量が異なる。

※銀の公定相場は金１両あたり銀50匁。ただし時代によって変動。

■銅（銭）貨＝計数貨幣

・天保通宝＝100文銭

・宝永通宝＝10文銭

・寛永通宝＝1文銭

・１貫文＝銭1000枚

※銅貨の公定相場は金1両あたり銭４貫文（4000枚）。ただし時代によって変動。

続きは10月15日発売の富士見L文庫にて。

©Akashi Shima 2014